

いよいよ今年^{ことし}の四旬節^{しじゅんせつ}が始まりました。四旬節^{しじゅんせつ}はイエス様^{さま}がメシア^{こうせいかつ}としての公生活^{はじ}を始める前^{まえ}、
 荒野^あで行^のわれた四十日^{おこな}間のこと^{よんじゅうにちかん}を黙想^{もくそう}しながら、そのイエス様^{さま}の受難^{じゆなん}と復活^{ふっかつ}を準備^{じゆんび}する期間^{きかん}で
 す。その四十日^{よんじゅうにち}の間^{あいだ}、イエス様^{さま}はただ祈り^{いの}と断食^{だんじき}をなさりながら、人間^{にんげん}の救い^{すく}のための、神様^{かみさま}の
 み旨^{むね}を探求^{たんきゆう}しておられたに違い^{ちが}ありません。その時^{とき}のイエス様^{さま}の心^{こころ}はどれほど複雑^{ふくざつ}だったでしょ
 うか。勿論^{もちろん}、イエス様^{さま}は神様^{かみさま}の独り子^{ひとこ}として、すべてにおいて御父^{おんちち}と完全^{かんぜん}に一致^{いっち}しておられました
 が、一方^{いっぽう}、一人^{ひとり}の人間^{にんげん}でもありました。言い換え^いれば、イエス様^{さま}は人間^{にんげん}が味わ^{あじ}わなければなら
 ないあらゆる苦しみ^{くるしみ}や悩み^{なや}みも、受けねばならなかつたわけです。そのイエス様^{さま}の荒野^あでの四十日^{よんじゅうにち}は
 どれほど辛^{つら}くて苦^{くる}しかったでしょう。しかも、その間^{あいだ}、悪魔^{あくま}は色々^{いろいろ}な甘い誘惑^{あまゆうわく}でイエス様^{さま}を悩ま
 せていたのです。

今日の福音^{きょうのふくいん}はイエス様^{さま}が受け^うられた悪魔^{あくま}の誘惑^{ゆうわく}について語^{かた}っています。先^まず悪魔^{あくま}は、四十日^{よんじゅうにちかん}間^{かん}
 断食^{だんじき}しておられたイエス様^{さま}に、「神^{かみ}の子^こなら、この石^{いし}にパン^{ぱん}になるように命^{めい}じたらどうだ。」と言
 い、イエス様^{さま}が自^{みづか}らの力^{ちから}でその空腹^{くうぷく}を癒^{いや}すようにと誘^{さそ}いました。そこで、イエス様^{さま}は「人^{ひと}はパン
 だけで生^いきるものではない。」という言^{ことば}葉^はでその誘惑^{ゆうわく}を退^{しりぞ}けられました。ここで一^{ひと}つ考^{かんが}えたいこ
 とがあります。それは、悪魔^{あくま}の誘惑^{ゆうわく}は「神^{かみ}の子^こなら、」という言^{ことば}葉^はから始^{はじ}まりましたが、一方^{いっぽう}、イ
 エス様^{さま}の答^{こた}えは「人^{ひと}は」という言^{ことば}葉^はから始^{はじ}まったということです。きつと悪魔^{あくま}はイエス様^{さま}が神様^{かみさま}の
 子^こであることを知^しっていたに違^{ちが}いありません。なのに、なぜ「神^{かみ}の子^こなら」という、つまり、「あ
 なたが本^{ほん}当^{とう}に神^{かみ}の子^こであるならば」という風^{ふう}に言^いったのでしょうか。それは、イエス様^{さま}を試^{ため}すため
 の罠^{わな}で、例^{たと}えば、イエス様^{さま}が石^{いし}をパン^{ぱん}に変^かえたら、悪魔^{あくま}に従^{したが}うことになります。また、それをし
 なかつたら、イエス様^{さま}は神様^{かみさま}の子^こであることを自^{みづか}ら否^{いな}むことになるか、或^{ある}いは、神様^{かみさま}の子^こだと名^な
 乗^{のり}る一人^{ひとり}の人間^{にんげん}になってしまうのです。そこで、イエス様^{さま}が選^{えら}ばれたのは、「人^{ひと}」のこ^ことでした。
 つまり、人間^{にんげん}はパン^{ぱん}によつてのみ生^いきるものではなく、命^{いのち}の真^{しん}の源^{みなもと}は別^{べつ}にある、ということ

す。それについては、他の福音に書いてありますが、命の眞の源とは、勿論、神様の御言葉です。神様の子でありながら、自ら人となられたイエス様は、洗礼によって神様の子となる人たちに、神様の御言葉こそ、人生の眞の道であり、命の源であることを示してくださいました。わたしたち信仰のある兄弟姉妹たちが、教会の中でも神様の御言葉を遠ざけ、石に過ぎない人間の言葉や規則を大事なもののようにし、それに従わせようとするなら、それは神様の子供たちにはふさわしくないことでしょう。

イエス様に向かう二つ目の誘惑は、世の中の国々の様々な権力と繁栄についてのことでした。

悪魔はそれをイエス様に見せるため、イエス様を高く引き上げました。そして、世界のすべての国々は自分に任されていると言い、更に、それを誰に与えるかは自分の決めることであると言いました。そして、イエス様が自分を拝んだら、それらものすべてをイエス様に与えると誘いました。そこで、イエス様は「あなたの神である主を拝み、ただ主に仕えよ。」という言葉で、その誘惑に打ち勝たれました。ここで、わたしは悪魔の話を考えてみたいと思います。悪魔は、世の中の国々の権力や繁栄が自分に任されていて、それを自分が認める人に与える権利も自分にあると言いました。つまり、世の中の色々な力や華々しいものは悪魔に属していて、それらのものに目がくらんだら、人間は自分も知らないうちに悪魔に認められ、悪魔を拝むことになるということです。その力や繁栄の類は様々で、しかも、教会の中にもそれらはあり得ます。色々な知識や経験、役割などがその力となり、また、個人的な繁栄となり、その力を振りかざし始めたら、教会の兄弟姉妹は神様ではなく、自分に仕える奴隷となるでしょう。イエス様はそれを私たちに悟らせてくださいました。

最後に、悪魔はイエス様を連れて神殿に行き、その屋根の端に立たせました。そして、「神の子なら、ここから飛び降りたらどうだ。というのは、こう書いてあるからだ。」と言い、二つの聖書

の言葉を用いてイエス様を誘惑しました。それは、『神はあなたのために天使たちに命じて、あなたをしっかりと守らせる。』という御言葉と、『あなたの足が石に打ち当たることのないように、天使たちは手であなたを支える。』という御言葉でした。確かに、この二つの御言葉によると、神様はご自分に信頼する人をどんな状況の中でも守ってくださるに違いありません。しかし、それは人が神様に従う限りのことでしょう。つまり、神様を自分に従わせようとしたら、その人の信仰は、もう無駄なものになってしまうのです。万一、イエス様が実際にその神殿の屋根から飛び降りたら、それは神様をご自分に従わせることになるでしょう。そうすると、イエス様に従う人たちの信仰は無駄なものとなるはずです。イエス様は真心をもって神様に従い、その信仰を御言葉とおこなう行いをもって証しされました。わたしたち信仰のある者たちも同様です。心では神様を自分に従わせながら、口では信じると言うなら、それは神様を欺くことに違いありません。また、いかに立派な信仰を持ち、あらゆる知識や経験に満ちていても、信仰のある者たちは、どんな形でも兄弟姉妹を自分に従わせようとしてははいけません。しかも、そういう振る舞いによって兄弟姉妹が信仰生活の疲れを覚えるようになったら、その責任は必ず問われるはずで

四旬節とは、神様が今までどのようにわたしたちを導いてくださったのかを思い起こしながら、その神様のもとに立ち返る決意を新たにする時なのです。この期間、わたしたちは心からの祈り、断食や節制、良い行いを通して悔い改めを表し、神様がそれを受け入れてくださるようお願いすべきです。この四旬節が、わたしたちを新たにしてくれる時となるよう、お祈りいたします。